

卒業生の保育実践能力に関する自己評価から見た 保育者養成校としての課題

森本美佐・林 悠子・東村 知子

奈良文化女子短期大学

Problems Faced by the Childcare Training School: From the Research of the Graduate's Self-Evaluation of Their Skills

Misa Morimoto, Yuko Hayashi, Tomoko Higashimura

Narabunka Women's college

本研究は、本学学生課就職係が行った「卒業生へのアンケート調査」の結果から、本学幼児教育学科の専門教育課程に関する課題を抽出し、保育現場での実践能力に繋げていくための教育の在り方について考察したものである。

その結果、卒業生は、保護者との関係作りなど授業や実習で体験できていない、或いは体験不足なことに対して大変な困難を感じていることや、授業で習ったことと現場での実践の統合が図れず、現在行われている授業が卒業生にとって十分に活用できていないことが分かった。保育の仕事の実態をイメージ化させるための授業の工夫や、実習以外での授業と実践の統合の場の必要性など今後の課題が明らかになった。

キーワード：卒業生、保育実践能力、保育者養成校、教育課題

1. はじめに

本短期大学幼児教育学科は、保育士と幼稚園教諭、ベビーシッターの3資格を卒業と同時に取得することが前提とされている学科である。実際、殆どの卒業生が保育士、或いは幼稚園教諭として従事している。そのため、一般の大学等での「キャリア教育」とは別で、保育現場で働くための保育者養成校としての「キャリア教育」が行われている。しかしながら、入学してくる学生は、必ずしも全てが保育者に憧れ、保育者を目指しているのではなく、「子どもが好きだから」や「高校の先生に勧められたから」という漠然とした理由で、明確な目的意識を持たずに入学してくる学生も多い。そのため保育者として就職後も学び続ける姿勢や保育の専門性の意識が十分に育たないまま就職し、知識・経験不足等から様々な問題に遭遇している者も多いと考えられる。また、それらの問題を解決できずに退職に至る者も少な

森本 美佐・林 悠子・東村 知子 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

くはない。

そこで、保育者養成校としての教育の在り方を考えるために、本学学生課就職係がこれまで実施してきた卒業生へのアンケート調査結果の分析を行った。その結果、卒業生が、卒後何に困難を感じ、何が必要と感じているのかを知ることができ、本学科のカリキュラムや教育プログラムの課題が明らかになったのでここに報告する。

2. 研究目的

本研究は、現段階では、学生が2年間（長期履修生は3年間）という限られた期間で保育者としての専門知識や技術を修得し、保育現場での実践能力に繋げていくための教育の在り方について考えていくことが目的である。そして本学のキャリア形成支援教育の課題を見出し、最終的には保育者養成校としての短期大学の役割を明らかにすることに繋げていくことが目的である。

3. 研究方法

3.1 調査対象者と方法

本学幼児教育学科の平成17年度から20年度までの卒業生を対象に、卒後半年後に就職係が行った「卒業生へのアンケート調査」の結果の再分析を行った。なお、平成17年度と18年度は合わせて平成19年に調査されていた。アンケートの回収率は表1に示すように低く、その内調査時保育者として働いている者は、平成17・18年度卒業生で合計28名、19年度は14名、20年度は5名であった。

表1 調査対象者の内訳

卒業年度	卒業者数	有効回答者数	回答率	保育従事者数
17・18年度	247名	40名	16.2%	28名
19年度	124名	19名	15.3%	14名
20年度	81名	9名	11.1%	5名

3.2 分析方法

就職係が実施したアンケートの目的は「就職指導や授業の満足度調査」であったが、今回は保育現場での実践能力に繋げていくための教育の課題を見出すことであったため、次の点について分析した。アンケート項目の中から、「本学で学んで、社会に出て役立つもの」「社会に出て、もっと学んでおけばよかったと感じたもの」「社会人になって必要と感じた力」「保育者として自分に必要だと感じたもの」

の4項目について、4年間の累計を出した。具体的な内容については、自由記述式で調査されていたものをカテゴリー化した。また、「学校に対する要望」の中から教育に関するものを洗い出した。

4. 研究結果

「社会に出て役に立ったもの」は何かという質問に対し、図1のようにどの年度も「実習」と答えた者が多く、次いで「授業」であった。「実習」では、「保育環境が具体的に分かった」「子ども達との距離が近くなった」「実習先の先生の子どもへの対応の仕方が勉強に立った」というような実際の現場を通して学んだことが書かれていた。「授業」では、「作り物はすぐに使えた」「手遊びやピアノなどはすぐに役立つ」など、保育表現に関する学びが多かった。その他、「フェスティバルや学祭での頑張りが社会でも生かせる」という意見もあった。

次に「学んでおけば良かったもの」の質問に対し、図2のように「授業」が多かった。次いで「実習」で「特になし」と答えた者も数名いた。

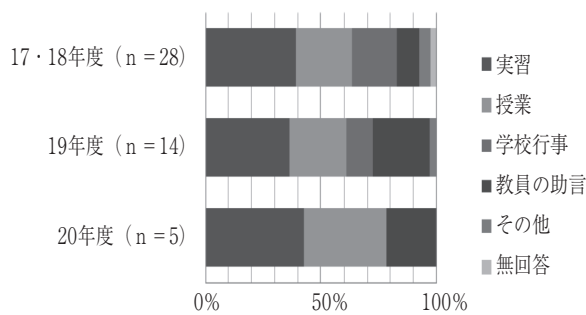


図1 役に立ったもの

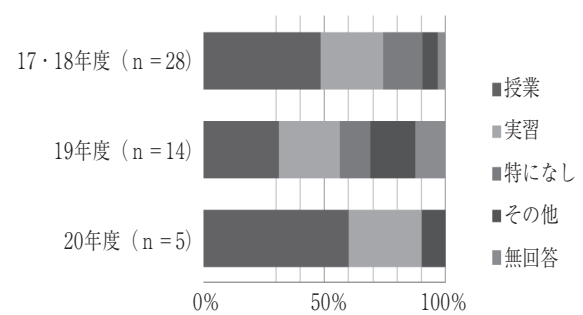


図2 学んでおけば良かったもの

表2 学んでおけば良かった授業内容 (n=42件)

項 目		17・18年度	19年度	20年度	合 計
保育表現	絵本	1	1	1	20
	手遊び	3	2	2	
	童謡			1	
	ピアノ	7		1	
	体育・リズム運動		1		
子どもの保健	病気対応	3	1		15
	感染症の発見	1			
	ケガの処置	1			
	赤ちゃんの状態		1		
	保健全般	1			
	発達段階			1	
	離乳食・ミルク		1	1	
	障害児対応	2			
	保健便り		1	1	
理 論	保育理論	1			4
	人間関係	1			
	子どもの心理	1			
	保育福祉		1		
記 録 践	週案など指導案の書き方	2			3
	連絡手帳の書き方		1		

表2は「授業」と答えた者の具体的な内容を表したものである。大きく4つのカテゴリーに分けて見ると、「保育表現」に関するものが20件、「子どもの保健」に関するものが15件であった。「保育表現」では、「手遊び」「ピアノ」が多く、「子どもの保健」では、ばらつきが見られていた。

「実習」と答えた者では、「もっと積極的に子どもと関わっておけば良かった」や「絵本の読み聞かせなど恥ずかしがらずに吸収すべきだった」「保護者との関わり方」「言葉の使い方」というような意見が見られた。又「実習期間が短い」「色々な園に行って様々な形態を学びたかった」という意見もあった。その他、「授業や実習と実際は全く違って、専門的なことをもっとしっかりと学びたかった」「ほとんどにおいて十分とは言えない」という意見もあった。

「社会人になって必要と感じた力」は図3に示すように、「主体性」「一般常識・マナー」と答えた者が圧倒的に多く、次いで「専門知識」となっていた。「基礎学力」と答えた者はどの年度もいなかった。

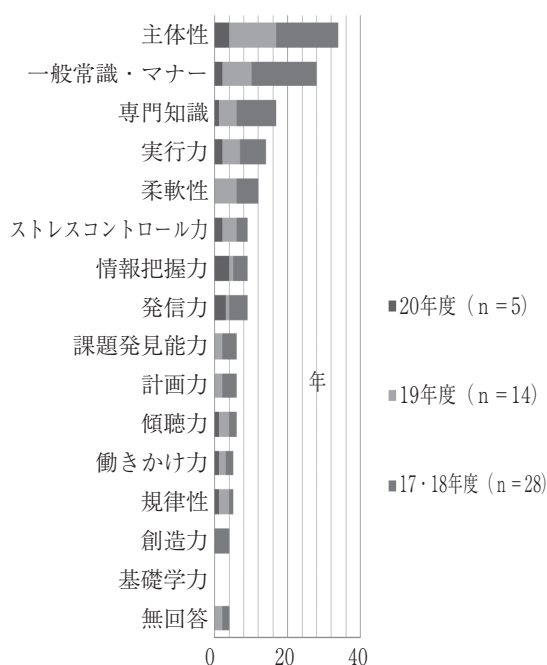


図3 社会人として必要な力

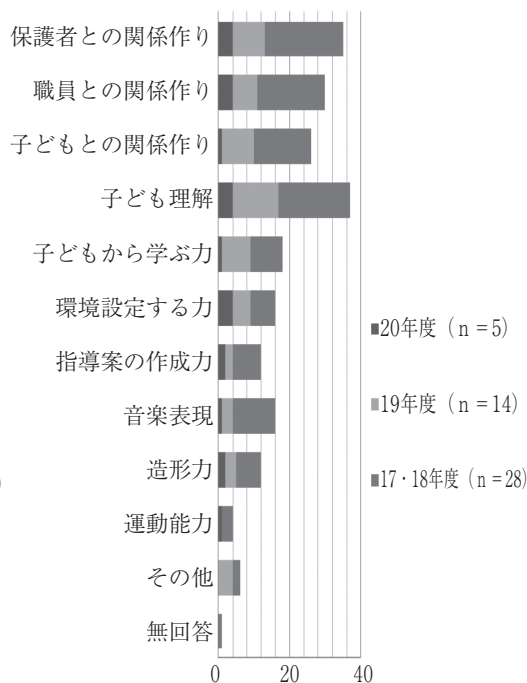


図4 保育者として必要な力

「保育者として自分に必要だと感じたもの」については、図4のように年度により多少の差はあるものの、「保護者との関係作り」「職員との関係作り」「子どもとの関係作り」「子ども理解」が多かった。何故必要と感じたかという具体例では、「関係作り」は「親からの相談や苦情に対するコメントができない」「保護者に信頼される関係作りがないと保育園と家庭とが協力して子どもを見守ることができない」「職員との関係ができていないと子どもによい保育を提供できない」「子どもが動いてくれないときの促し方が分からない」という意見が上がっていた。「子ども理解」では、「病気の対応の理解が不十分」や「子どもの言葉や気持ちの理解ができていない」が上がっていた。他に、「異年齢クラス保育の環境設定が難しい」「お泊まり保育の対応ができない」という意見も見られた。

「学校に対する要望」では、「週案や保健便りなど書類の書き方を具体的に教える授業が必要」「困ったときの具体例など焦ることなく対応できるような授業が必要」「習ったことが現場でつながらない」「もっとゼミなどで自分の追求したい分野が勉強できると良い」との意見が見られた。

5. 考察

卒業生が社会に出て役立ったものは「実習」であり、もっと学んでおけば良かったと感じているものは「授業」であった。「授業」の中でも「造形力」などは少なく、「作り物の授業は役に立った」と答えていることから、学内での演習や実習で体験したことはそれなりに身に付けられていることが伺える。また、保育者として自分に必要と感じているものは、「関係作り」や「環境設定する力」などが上がっており、これらは講義の中では押さえられていても、実習では体験しにくい項目であった。実践に生かせる具体的なノウハウではない抽象的な理論という形でしか伝えられない授業内容については、学べていないと感じていることが分かった。一般に、理論は実践で使われてこそその本来の意味が理解でき、講義のように受け身形式の授業では、実践につながらず理解が難しいと言われているが、まさしくその結果であるといえる。香川ら¹⁾の看護学生を対象とした研究では、「臨地では、学生の現在の行為が未来の患者の容態変化と繋がっている上、学生は、患者の変化の都度継続的に行為を調整していくが、学内では、学生の現在の行為は看護対象の未来の容態変化ではなく、合格・不合格と繋がっている上、対象と行為の関係が一時点で終わる。」と分析されている。これは、保育を学ぶものに関しても言えることで、本来は流動的である保育環境や子ども達の変化がある現場とは異なり、学内の授業では一般的で変化のない子どもの事例や環境を学ぶ。この時間の流れの差が学びの実感の差異を生み、更に授業では常に学生の関心は「試験の合格・不合格」にとらわれ、学内での学びは現場に繋がりにくいものと推測される。

しかし学んでおけば良かった授業内容では、演習科目である「保育表現」に関するものが多く、中でも「ピアノ」は半数近くあった。本学は、ピアノ初心者への入学も受け入れていることも原因ではあると思われるが、文部科学省の委託事業として目白大学短期大学部が行った「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」²⁾でも、専門的職業能力の育成の中で「ピアノ技術」は、ピアノができる保育者は子ども達の音楽環境を豊かにするという理由等から他の項目よりも必要性が高い値になっており、卒業生も実感しているのではないだろうか。他の「保育表現」に関する項目も同様に、子ども達の環境を豊かにするために、もっと深く学んでいくべきであったという思いの表れではないか。

次いで「子どもの保健」に関するものも多く、保育者として必要と感じている「子どもの理解」の中でも、「病気の対応の理解が不十分」という意見も見られていた。上野らの保育者に対する調査³⁾でも、卒業生に力をつけてほしい領域として、保健に関することが上位に上がっていた。「子どもの保健」は2年次で演習が入り、「造形」などと同様に具体的なノウハウも学ぶ。しかし「病気やケガの対応」や「保健便り」などは、実際実習現場では行うことは少ない。見学の機会もないこともある。また、医療的な知識も必要となり、「難しい」という気持ちが先立ち、必要性を感じないと勉強への興味が持てない。

更にこの調査が行われたときは、未だ「小児保健」「小児保健実習」という教科目であった事も原因であると思われる。平成23年度から保育士養成課程の改正が行われ、講義科目としての「子どもの保健」そして演習科目として「子どもの保健Ⅱ」に変更され、「子どもの保健Ⅱ」では演習の強化を図る授業を進めていくことが望まれている。従来の「小児保健実習」は講義と学内実習で、講義では「小児保健」との重なりも多く、実技時間も少なく行われる内容も十分ではなかった。そのため、「小児保健」の発展的授業とはなり得なかった。又、最終評価は試験で行われており、学生は試験の合格のための学習で、演習科目としての特性は活かされていないものと推測される。実習ではなかなか体験できない分、演習科目としての振り返りを大切にしたり分かりやすい授業の在り方が今後望まれる。

社会人になって必要と感じた力の中では、「主体性」「専門知識」という項目が上位に上がっている。これらをも高めるためにも、教えるだけでなく学生自身に考えさせたり気付かせたりする事が大切であり、「子どもの保健Ⅱ」を始めとする演習科目の授業方法の検討が必要である。またどの年度も「基礎学力」が必要と答えた者は一人もいなかった。卒業生が苦手とする指導案や保健便りの作成などには国語力が必要であるが、国語力などの基礎学力が保育実践に与える影響についての認識が薄いために基礎学力不足の自覚がないものと思われる。

卒業生が困っていること具体例として、「異年齢クラス保育の環境設定が難しい」「お泊まり保育の対応ができない」「週案や保健便りなどの書類の書き方が分からない」「保護者との対応が難しい」という意見が見られた。高橋ら⁴⁾の調査でも同様の結果が出ており、これはまさしく実習での体験もなく「学内で習ったことが現場で繋がらない」状態である。つまり習ったこととフォーマットが違うとできない、或いはイメージ化できないことはできないという状況である。保育の仕事の実態を様々な角度から伝えたり、演習体験によりイメージ化させていくなどの授業の工夫や、実践的な課題設定学習型授業などが望まれる。また、各授業での分断化された知識が統合できずに終わってしまっている状態である。統合の場が実習に限られており、その実習で体験できなければ本来の意味が理解できずに試験用の知識で終わってしまう。実習以外での統合の場も必要ではないかと考える。

6. まとめ

今回の調査で、以下のことが示唆された。

- ① 卒業生が社会に出て役だったものは「実習」であり、もっと学んでおけば良かったものは「授業」であった。授業で習ったことと現場での実践の統合が図れず、現在の授業が卒業生にとって十分に活用できていないことが分かった。
- ② 学んでおけば良かった授業内容は、「保育表現」と「子どもの保健」に関するものが多かった。
- ③ 「保護者との関係作り」など授業や実習で体験できていない、或いは体験不足なことに対して大変な困難を感じていることがわかった。
- ④ 保育の仕事の実態をイメージ化させるための授業の工夫や、実習以外での授業と実践の統合の場の必要性など、保育現場での実践能力に繋げていくための教育の在り方についての課題が明らかになった。

7. おわりに

今回は、限られた期間で学生が保育者としての専門知識や技術を修得し、保育現場での実践能力に繋げていくための教育の在り方の課題について考察することに留まった。考察を進めるにあたり、本学のキャリア形成支援教育の鍵となる課題は、今回は追求できなかったが「分断された授業」にあるのではないかと思われた。高等教育機関として、本短期大学も、教員の専門性を行かした様々な授業の工夫が測られているのは言うまでもない。学科教員や教務委員会が中心となり、カリキュラム構築等にも力が注がれている。しかしながら授業と実践の統合が図れず、卒業生は活用できていないなど今回明らかになった現実をしっかりと受け止め、今後「本学の学生のための教育」を最優先に、各教員が「繋がる授業」にむけての共通認識と協働意識を持って取り組んでいかなければならないと考える。

8. 謝辞

本研究は、本学学生課就職係が行った卒業生へのアンケート調査結果を再分析したものであり、データベースを提供して下さったことに深く感謝致します。

引用文献

- 1) 香川秀太・茂呂雄二 (2006) 看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成—校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析—。教育心理学研究：346-360.
- 2) 目白大学短期大学部研究代表者 佐藤弘毅 (2011) 短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究成果報告書。文部科学省平成21-22年度先導的の大学改革推進委託事業。
- 3) 上野春代・斎藤貴子・山口雄三 (2006) 幼児教育学科卒業生の就労能力に対する社会的評価。新潟青陵大学短期大学部研究報告36号：111-119.
- 4) 高橋哲郎・元田幸代 (2005) 幼児教育現場への適応を促す実践的保育者養成の教育プログラム—理論と実践の統合—。精華女子短期大学紀要：37-42.

参考文献

- 大嶋恭二 (2008) 保育士の専門性と養成の課題。東洋英和大学院紀要：1-15.
- 大津泰子 (2010) 保育士の専門性を高めるための課題—保育士養成の動向から—。近畿大学九州短期大学研究紀要 Vol.40：13-26.

